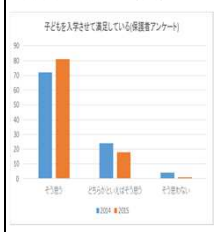
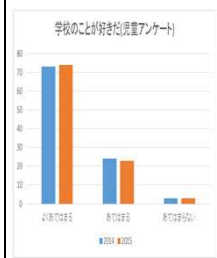
２０１５年度　学校評価報告書　（ 大阪聖母学院小学校 ）

学　校　目　標 （園　目　標）	カトリックの宗教的な価値観を基盤として、 『人を愛し、自らを高める強い意志と豊かな心を持つ子ども』を育成する。

校　長	荒川　伸二

重　点　目　標	目指す子ども像 ・すべての友だちを大切にする子ども ・友だちと支えあい進んで学習する子ども ・正義のために自分の力を喜んで発揮する子ども ・健康や安全に留意する子ども

学校自己評価					
年度目標				年度評価（２０１６年３月３１日 現在）	
番号	大目標	重点目標	具体的方策	取組の成果	次年度への課題と改善
1	建学の精神に基づく教育の徹底	体験することによって得られる発見や疑問等の気づきに基づき、自らの体験学習を振り返ることを通して、考える力、実行する力を育成する。	ⅰ）宗教的体験 ・典礼暦（聖書のみ言葉）に沿った生活目標を設定し、日常生活において愛・奉仕・正義の精神を実践する子どもの育成を目指す。 ・祈りで始まり、祈りで終わる学校生活を通して、感謝と思いやりの心を育む。 ・祈りの集い、ロザリオの祈りへの参加やお米一握り運動等を通して、奉仕の精神を学ぶ。	典礼暦(5月聖母月、10月ロザリオ月、12月待降節、3月四旬節)において、各クラスで実践目標を決め、月末にその実践を振り返り、全校でまとめの集いを実施した。清掃活動、合宿においてもその都度反省と振り返りを行うことで、子ども自分の成長を確認し、自己肯定感を育成することができた。 結果、アンケート項目「仲の良い友達がいる、クラスの友達と仲良くできる」においては子どもの回答が100%という結果になったことは大変うれしい結果である。一方、「今の学年で友達からいじめられたことはない」の項目では3%の子どもが当てはまらないと回答する結果となった。	子ども達が良好な人間関係を今後も維持していけるよう、体験学習を継続して実施していく。 「友達を大切にする、自分の力を周りの人のために使う、ルールを守る」という3つの力を子どもたちがつけることができるよう指導していく。 一方で、いじめは許されないことを継続して指導するとともに子ども達の情報を教員間で共有するなど組織として子どもの指導にあたる。
			ⅱ）奉仕活動と福祉体験 ・各学年で実施される合宿や、全学年縦割りの班で行う清掃活動を通して、友達との豊かな関わり方を学ぶ。 ・各学年で実施される福祉体験活動等を通して、神様から与えられた命はみな平等で尊いこと知り、一人ひとりを大切にする心を育てる。		
			ⅲ）グローバル人材の基礎 ・５年生選択合宿（ホームステイ・夏山合宿・ＢＳＣ合宿）を実施したり、できる限り海外の子どもたちとの交流を受け入れたりすることで、交流体験をとおして他者との違いを認め、協働していくグローバル人材の基礎を育成する。	５年生選択合宿において、５名がホームステイに参加し、異文化を体験し理解を進めることができた。 海外の子どもたちを受け入れ交流する機会を設けることはできなかったが、カンボジアの子ども達に学習品を送る「友達来来便」の活動を通して海外の子ども達の生活を知ることで、子ども達は視野を広げることができた。	５年生のホームステイ合宿を継続して行う。 「友達来来便」の活動を児童会の子ども達の活動に位置づけ、より深く、広く海外の子ども達の生活を知る機会を提供し、グローバル的視野を持たせるよう指導する。
		① 学力の保障 「学ぶ喜び」「わかる喜び」「認められる喜び」を実感できる、楽しく質の高い授業を通して、高い学力を保障する。	ⅰ）宗教科教育 ・道徳や倫理上の違いを意識し、神（サムシング グレード）の存在に畏敬の念を持つことと、他宗教を尊重しながら、カトリックの考える平和な世界を理解するよう指導する。 ・聖書にもとづいてカトリックの精神を学び、実践していく態度を育成する授業を実施する。 ・カトリック教会の神父様に、宗教科の研究授業を各学年で月３～４回程度シリーズで実施していただき、担任は宗教専科の授業にＴＴとして入ることで、宗教の授業を学ぶ機会とする。	「宗教の授業で学んだことは、生活の中で役立っている」「この学校でお祈りや聖歌、神様のことを教えてもらってよかった」の項目では、それぞれ95%、99%という回答であった。 カトリック教会の神父様に、宗教科の研究授業を各学年で月３～４回程度シリーズで実施いただき、担任は宗教専科の授業にＴＴとして入ることで、宗教の授業を学ぶ機会としたことで、教員の宗教研修の機会が増えたことも上記の結果に寄与したと考える。	来年度も子ども達の宗教に対する意識が高まり、学校生活をより豊かにしていくことを目指す。 カトリック教会の神父様に、宗教科の授業をしていただく機会をさらに増やしていけるようにしたい。
			ⅱ）国語教育 ・各学級の朝の時間を利用して、フラッシュカードによる漢字の読み先習や音読を実施し、４年生１学期までに小学校で習う漢字の読みを先習する。 ・全校で受検する漢字能力検定試験の合格を目標に、漢字ノートを使っての漢字学習指導を実施する。 ・年度末の２月・３月は、一つ上の学年で習う漢字の学習に取り組む。	「国語の授業はわかりやすい」という項目は100%という結果となったことは大変うれしく思う。 漢字検定では、合格率99%であった。	来年度も漢字の読み先習や音読、漢字学習指導を継続して行い、漢字検定試験合格を目指す。
			ⅲ）算数教育 ・算数は、全学年においてチームティーチング体制で指導にあたり、全体と個別の両指導を織り交ぜることで、理解の徹底を図り、学力の向上につなげる。 ・外部検定試験として数学検定試験を実施し、当該学年の級を全児童が合格することを目指すとともに、児童に客観的に自らの学力を認識することで、算数への意欲を高める。 ・６年生では算数習熟度別クラスでの指導を実施する（５年生も適宜、習熟度別を行う）。	「算数の授業はわかりやすい」という項目は98%という結果となった。全学年においてチームティーチング体制と習熟度別学習を実施することで一人ひとりにあった指導ができた結果と考える。 算数検定は合格率99%となった。	来年度は「算数の授業はわかりやすい」の項目が100%となることを目指す。 全学年においてチームティーチング体制と習熟度別学習は継続して実施する。 算数検定の合格率アップを目指す。 そのために、各学年で定着させるべき内容は該当学年でしっかりと習得させることを徹底するため、授業を改善するとともにテスト実施後の復習の時間を充実させるよう指導計画を作ることとする。
			ⅳ）その他の教科 ・理科、音楽、図工、書道の授業では専門の教員を配置する専科制とし、子どもたちの感性を育て、個性と能力を最大限に伸ばす。 ⅴ）伝統的な文化に関する教育の充実 ・五色百人一首、素読などの伝統教材を有効に活用した魅力ある授業を展開し、日本人としてのアイデンティティを体感する。 ・低学年の昔遊びや書道体験教室及び５年生の和装礼法には外部から専門家を招き体験を重視した教育を実施する。	「理科の授業はわかりやすい」の項目は100%、「音楽の授業は楽しい」は97%、「図工の授業は楽しい」は99%であった。 書道においては　3年生以上の児童の80%が優秀賞以上を受賞することができた。	来年度も専科制を継続する。 伝統的な文化に関する教育、低学年の昔遊びや書道体験教室及び５年生の和装礼法も外部から専門家を招き体験を重視した教育を実施する。
		② ２０２０年度の英語の教科化(５・６年生)に向けての英語教育	ⅰ）本物の英語に触れる体験と小中高における指導体制強化 従来のネイティヴ教員を含む、チームティーチングでの英語授業体制を継続し、コミュニケーション能力の素地を養う。特に、６年生においては、内部中高の英語教員の参加による少人数制授業を実施し、指導体制を強化する。	「英語の授業は楽しい」は97%であった。 ネイティヴ教員を含む、チームティーチングでの英語授業と内部中高の英語教員の授業に加え、3年生においては英語劇、4年生以上は他教科での既習内容を英語で表現することを通して、表現力を伸ばすことができた。	来年度は、「英語の授業は楽しい」が100%となることを目指す。 ネイティヴ教員を含む、チームティーチングでの英語授業と内部中高の英語教員の授業を継続する。また、3年生においては英語劇、4年生以上は他教科での既習内容を英語で表現する学習も継続する。 内部中高の英語教員の参加による少人数制授業は来年度は4年生において実施し、今年度の効果と比較検討し、より効果的な取り組みを目指す。
			ⅱ）指導用教材開発 イマージョン教育用のテキストを使用し、英語に親しみながら実用的な英語の力を付けていく。		
			ⅲ）外部検定試験の活用 ジュニア・イングリッシュテストを実施し、受検への準備を通して子どもたちの英語学習に対する意欲を更に向上させていく。	ジュニア・イングリッシュテストの合格率は99%であった。	ジュニア・イングリッシュテストの合格率100%を目指す。受験希望の級が各学年の子どもに複数存在するため、受験前の練習をできるため個別指導できるよう体制を整える。
		③ ＩＣＴ教育	スマートボード、プロジェクター(電子黒板機能付)及び書画カメラを活用し、映像、画像などの視聴を通して子どもたちに分かりやすい授業を提供する。	移動式プロジェクターを用意し、映像、画像などの視聴を通して子どもたちに分かりやすい授業を実施した。	移動式プロジェクターでは限界があるため、各教室にプロジェクターを設置する。 教員から一方向の授業となっているため、端末機器を用意し、児童の表現力を培う。
		④ 放課後活動の充実	・プチパの充実 宿題の時間確保等の学習支援活動、外国人英会話・鬼ごっこ・遊具遊びなどの多様な体験プログラム及び自由遊び・読書などをとおして、一層の利用者の増加を図る。	一層の利用者増加を図るため、指導員の研修も実施し、種々の活動の充実を図った。	一層の利用者増加を図るため、委託業者変更も視野に入れ、抜本的に活動を見直す。
			・アフタースクールの新設 実験教室の追加など新たな教室を開催し、一層の利用者の増加を図る。	理系分野の教室がなかったが、実験教室を新たに開催し、アフタースクールの充実を図った。 海外からの見学者を受け入れるなど質の高い実験教室が開催できた。	来年度も放課後預かりから放課後教育のアフタースクールを目指す。豊富な教室を提供するため、新しい教室の開催を目指す。
2	教育・指導の充実	① 確かな学力の習得	ⅰ）研究授業 ・各学期に１回、全教員が授業を見学する研究授業を実施する。外部から専門家を招き、指導・助言を受け、授業分析を行う。 ・全教員が年に最低１回、公開授業を実施し、他の教員から指導や助言を受ける。	学期に1回ずつ、合計3回研究授業を実施した。外部から専門家を招き、指導・助言を受け、授業分析情報を全教員で共有することで、教員の授業力の向上が図れた。 研究授業と別に公開授業を全教員が実施し、主に管理職が指導した。	研究授業、公開授業、各研修はともに各教員の力量向上に寄与したが、各授業での反省や振り返りを積み重ねていくことか来年の課題と考える。
			ⅱ）各種研修 ・宗教研修を年４回実施し、カトリックへの理解を深める。神父様の宗教の研究授業に参加し、道徳にとどまらない宗教の授業を実践する力を身に付ける。 ・定期的に外部から専門家を招き、生活指導、発達障害などの研修を行うとともに、聖母教育支援センターの学校カウンセラーと日常的に相談を行い、子どもたちの自己肯定感を育成する教育を実施する。 ・若手教員育成のために指導教員を配置し、指導案作成や授業の進め方の指導を行う。	カトリック教会の神父様の講話を聴く機会は、2回にとどまった。 講師を招いて、障害者差別解消法について学び、ユニバーサルデザインなどの研修を実施した。 指導教官を採用し、若手教員の育成に努めた。	
		②自己点検と評価	ⅰ）教員評価 教員一人ひとりが、「ＳＥＩＢＯ ５」にもとづいた本年度の目標を設定し、各自がその進捗状況を自己点検していく。あわせて、管理職が授業を参観・助言し、目標達成と教育力の向上を目指していく。 ② アンケートの実施 例年同様、学校評価アンケートを実施し、子どもたちが「学校が楽しい」と心から言える学校づくりを目指し、その推進に努める。年度当初に掲げた学校教育目標が、どの程度子どもたちの学校生活において具現化できているか、児童対象アンケート、教員対象自己点検アンケート、保護者対象アンケートを実施し、その結果と改善に向けた取り組みを計画し発表していく。	各教員が「ＳＥＩＢＯ ５」を作成し、公開授業等による管理職の指導を受け、自己点検を実施した。 子ども達のアンケートを6月と2月に実施した。保護者アンケートを10月に実施した。 ほとんどの項目で90%以上の肯定的評価となったが、子どものアンケートでは、「自分のことが好きだ」の項目ではそう思うという回答が89%に留まった。保護者のアンケートでは、「学校と保護者との連絡は密に行われている」「保護者への学習状況は十分に説明なされており、相談を気楽にできる」という項目で、そう思うという回答が90%に留まった。	自己肯定感が低い子どもが10%、学校との連絡が十分でないと感じている保護者が10%いることが課題である。 子ども達は、自分の長所を受け入れることが苦手と考えている。学習活動に振り返り活動を入れ、自分の成長を自覚する作業を通して、自己肯定感を育成させたい。 保護者に対しては、学校が情報交換をする機会を増やすことで改善を図りたい。
3	財政の健全化	募集活動の強化による入学者数の確保	ⅰ）ホームページの活用 ・トピックスを毎日更新し、ホームページを閲覧する入を増やし、学校生活の様子を広く広報するとともに、入試行事への参加者を増やす。 ・携帯サイトを作成し、より見やすいホームページに改良し、アクセス数の増加を図る。 ⅱ）来校者増加のための企画 ・入試説明会やプレテストの他、体験会を新規に企画し、学校を見てもらう機会を増やす。 ・個別訪問を積極的に受け入れ、志願者が訪問する機会を増やす。 ⅲ）塾・幼稚園対応 塾・幼稚園主催の入試説明会に積極的に参加し、本校の取り組みと入試説明を行う。 ⅳ）複数の入試回数の確保	トピックスを毎日更新、携帯サイト用ホームページを作成し、ホームページを改良し、アクセス数の増加を図った。 体験会を新規に企画し、学校を見てもらうだけでなく、本校にどんな教員がいるのかを保護者と園児に知ってもらう機会となった。 塾・幼稚園主催の入試説明会に積極的に参加し、本校の取り組みと入試説明を行った。 ３回の入試を実施し、定員確保に努めた。 上記の募集活動の強化を実施したが、入学者数の確保にはつながらず、新1年は、2クラス編成にとどまった。	2017年度新1年を90名確保することが課題である。募集活動の強化に並行して、選ばれる学校となるため、教育課程を抜本的に見直すことを通して、募集定員確保に努める。 また、年間3回の転入試験、随時帰国子女の編入試験も実施していく。
4	環境の整備	①施設安全点検	子どもたちにとって常に安全・快適であるように、教員による施設安全点検を月１回実施し、整備に万全を尽くす。	施設安全点検を月１回実施し、施設の整備に努めた。古くなった理科室と作業室の児童椅子を新たに購入した。木立の広場の木登りのできる木の老朽化に伴い、2本のうち1本を本上り使用禁止とした。	次年度は、老朽化した図書館の椅子など、古くなっているものを新調していく。
		②耐震工事の完了と諸設備の整備	・Ｃ棟耐震工事 ・Ｄ棟空調改修工事(３カ年計画) ・一般教室へのプロジェクター（電子黒板）導入 ・ベルナデッタホール　１階男女トイレ改修 ・小運動場 遊具補修	・Ｃ棟耐震工事 ・Ｄ棟空調改修工事(３カ年計画) ・一般教室へのプロジェクター（電子黒板）導入 ・ベルナデッタホール　１階男女トイレ改修 ・小運動場 遊具補修 上記すべてを実施し、安全配慮に努めた。	次年度は、安全面だけでなく、iPadなどの端末機器など授業に使用する教育機器を新調していく必要がある。
5	一体感の醸成	① 保護者会	・保護者の要望に対する報告・連絡・相談において、これまで以上の徹底を図る。 ・学校の様子や発生した問題は可能な限り保護者会役員にも知らせ、共有する。 ・学級委員で編成する「広報部」「文化教養部」「ボランティア部」と連携し、保護者に満足していただける活動を計画していく。 ・後援会を新設する。	学級委員で編成する「広報部」「文化教養部」「ボランティア部」において保護者に満足していただける活動を実施してもらうことができた。 保護者会の協力を得て、後援会を新設することができたことを大変ありがたく思う。おかげで、次年度教育環境を改善する見通しを持つことができた。	後援会の設立により、次年度はプロジェクター、iPad、テレビのいずれかの教育機器を購入し、授業の向上に努める。 アンケートで学校と保護者との連絡が十分ではないと考えている保護者が10%おられることが課題であり、さらなる情報収集と発信に努めたい。
		② 同窓会(さくら会)	さくら会行事の運営（総会、運動会での売店、成人式など）に対して、連携し、卒業生との円滑な交流を図る。	さくら会行事のには、総会、運動会での売店、成人式等の活動を滞りなく実施していただけた。	卒業生と幅広く情報を交換していくことが課題である。行事のみではなく、懇親会等、意見を聞く機会を設けたい。
		③ 大阪聖母女学院中学校・高等学校	ⅰ）児童と生徒の交流 本校の子どもたちと大阪聖母女学院中学校・高等学校の子どもたちのつながり力の強化を目指す。具体的には、年齢差を超えたコミュニケーション能力の育成を目指す。 ・クラブ交流の継続(４・５・６年生) ・大阪聖母女学院中学校３年生とのコミュニケーション講座の一貫としての交流 ⅱ）小中高一貫のカリキュラムの検討 ・６年生への大阪聖母女学院中学校・高等学校教員の英語授業参加による指導方法の合同研究と、大阪聖母女学院中学校へつなぐカリキュラムの検討を行う。 ・宗教科教員における小中高一貫のカリキュラム共同開発の検討を行う。 ⅲ）入試広報の連携 ・本校の参観日ごとに大阪聖母女学院中学校・高等学校の説明会を案内し、教育活動情報を積極的に公開することで内部進学者の確保に努める。 ・さくらｉｎ聖母の日にオープンスクール（アフタースクール体験）を同日開催することで、大阪聖母女学院中学校・高等学校の強しと連動し、大阪聖母女学院中学校への案内も同時に実施する。 ⅳ）聖母教育支援センターとの連携 ・聖母教育支援センターの学校カウンセラーと日常的に相談を行い、子どもたちの自己肯定感を育成する教育を実施する。 ・教育相談の対象を保護者にも広げ、適宜、学校カウンセラーと保護者をつないで行く。 ・『ボランティア室』と連携をとり、子どもたちへの紙芝居実施などをとおして子どもたちの支援に努める。	クラブ交流(４・５・６年生)を今年も継続した。 大阪聖母女学院中学校３年生とのコミュニケーション講座の一貫としての交流は実施できなかった。 ６年生への大阪聖母女学院中学校・高等学校教員の英語授業参加による指導方法の合同研究を実施できたが、大阪聖母女学院中学校へつなぐカリキュラムづくりまでに発展させることはできなかった。 本校の参観日ごとに大阪聖母女学院中学校・高等学校の説明会を案内し、教育活動情報を積極的に公開することで内部進学者の確保に努めることにつながった。 聖母教育支援センターの学校カウンセラーと日常的に相談を行い、児童理解を深めることができた。	小中一貫校づくりが文部科学省からも推奨されている昨今、本校においては、小中高の連携が可能となっている恵まれた環境であることを鑑み、行事等の連携にとどまらず、カリキュラムにおいて連携することが課題と考える。その第一歩として、育てたい子供像、生徒像を共有することから始めたい。 また、教科においては、英語科における連携が一番進んでいるため、カリキュラム連携は英語科から始めたいと考えている。
		⑤ 京都聖母学院幼稚園	京都聖母学院幼稚園主催の入試説明会に参加し、本校の取り組みと入試説明を行う。	京都聖母学院幼稚園主催の入試説明会に参加し、本校の取り組みと入試を説明した。また、幼稚園年長遠足地として本校裸足の広場を開放した。	来年度も同様の活動に協力したい。
		⑥ カトリック教会	カトリック教会の神父様を招いて勉強会を開催（年３回）し、教員のカトリック教育（子どもたちの心の教育）に対する指導力向上を図る。	カトリック教会の神父様を招いて勉強会は年2回の開催となった。	カトリック教会から発信される情報、研修会の情報を教員に今以上に発信し、現代のカトリック教会の方向性を理解する。

学校関係者評価
実施日　２０１６年１０月２７日
学校関係者からの意見・要望・評価等
学校評価アンケートの結果に基づき、ご意見等いただいた。 ①2015年度の保護者学校評価アンケートの結果によれば、「学校と保護者との連絡は密に行われている」「保護者への学習状況は十分に説明なされており、相談を気楽にできる」という項目で、そう思うという回答が90%に留まったことについて、「わが子は進んで学習する子どもに育っている」も86%に留まっていることと併せて、次のような意見をいただいた。 ・保護者は勉強と友達関係に関心が高い。1,2年の頃は家庭学習や友達関係もあまり難しくないが、3,4年になると学習内容が難しくなり、友達関係も学校だけではなく、塾の友達関係も加わり複雑になってくる。そのため、学校からの情報をより知りたくなってくる。このことが、学校との連絡をより希望する理由の一つになっているのではないか。 ・保護者の感じ方は様々である。どの程度のけがで連絡がほしいと思うかにおいても個人差がある。学校との連絡への感じ方についてその違いが結果に出て来ることはある程度は致し方ない面があると思う。 ・学習については、テストで一旦結果が出るが、その後、補習等で学力保障の充実をお願いしたい。 ②「朝ごはんを食べている」は99%、「家族みんなで何かを一緒にする機会が多い」は84%となっていることについて次のような意見をいただいた。 ・親としてとても興味深い。学校が大切に思っている内容を伝える機会ともなっているので、保護者に家庭の過ごし方について質問することをこれからも続けてほしい。 ③内部中学校との連携について、小学校のクラブに中高生が参加するなどの活動があるが、もっといろいろな行事において連携をとることが望ましいというご意見をいただいた。 ＊学校評価アンケート一部抜粋